S. ブラックバーンの投影主義について：源泉であるヒュームの理論に着目して

関西大学　新田杏奈

S. ブラックバーンは、私たちの道徳的思考や道徳的判断を下すといった道徳的な営みを、道徳実在論的な基盤なしに、準実在論によって説明する（Blackburn1993）。道徳実在論とは、道徳的述語「善い」「悪い」が指示する道徳的性質と呼ばれる性質が実在すると考え、その道徳的性質がいかなるものかであるかを説明する、メタ倫理学の立場の一つである。加えて、道徳実在論は道徳的判断に関して次の主張をとる傾向にある。すなわち、道徳的判断に登場する道徳的述語は実在する道徳的性質を指示しているのであり、道徳的判断を下すことは、そのような道徳的事実についての記述であるという主張である。一方、ブラックバーンの準実在論は、投影主義(projectivism)と付随性（supervenience）を組み合わせ、私たちの道徳的態度を核にして道徳的営みを説明する。本発表では、ブラックバーンが道徳実在論に反対する理由に触れつつ、その理由ゆえに主張される投影主義について論じる。

投影主義とは、道徳的価値を、私たちの道徳的感受性の働きに着目し、自然的性質と、その自然的性質に対する私たちの反応によって説明する学説である。その仕組みは次のように説明される。まず、私たちは対象がもつその自然的性質に反応する。反応は、自然的性質が情報として、私たちの道徳的感受性に入力されることで引き起こされる。次に、反応は道徳的感受性を通して道徳的態度に変換される。最後に、私たちが道徳的発話を行うとき、反応は道徳的態度として世界の側に出力される。このように、道徳的発話によって道徳的態度が出力されるとき、私たちは自らの道徳的態度を世界の側に押し拡げている。その結果、道徳的価値は、私たちによって世界に塗り拡げられているものだと説明される（Blackburn1981）。この主張は、ヒュームの『道徳原理の研究』の補遺 1 における心が持っている産出的ないし投影的な力に関する理論にその源泉がある。

加えて、投影主義は、道徳的性質の付随性という形而上学的見解のうえに成り立つ。付随性とは、道徳的性質と自然的性質の論理的な結びつきである。道徳的性質が自然的性質に付随するのは、道徳的性質が自然的性質と同一でなく、自然的性質が変化することなしに道徳的性質が変化することは論理的に不可能である場合に限る。ブラックバーンは、いくつかの論考を通して、道徳的性質の付随性を自然に説明できる理論が投影主義だと示している（Blackburn1993）。すなわち、道徳的判断を下す際には、私たちは自然的性質に反応し、その自然的性質ゆえに道徳的態度を抱いている。まさにそのことが付随性を説明する。このとき、道徳的判断に登場する道徳的述語「善い」「悪い」は、投影される是認や否認の態度であると説明できる。同時に、道徳的発話によるこうした態度の投影は、それに対応する道徳的性質があたかも実在するかのように語ることである。であるから、道徳的性質は私たちの態度に由来するものとして、準実在的な性質だと説明できる。このように、ブラックバーンは道徳実在論的な基盤なしに道徳的な営みを説明する。これが準実在論の立場である。

道徳的判断に関する主張として投影主義を捉えるとき、投影主義は道徳的判断を下す過程を説明する装置に過ぎない。だが、ブラックバーンが道徳的判断の道徳的真理概念について論じる際に、投影主義の仕組みそれ自体が大きく関わってくる。本発表ではそのことを、*Spreading the Word*(1984)での、ヒュームの”Of the Standard of Taste“を交えつつ、道徳的感受性の「欠陥」と「改善」の概念によって道徳的真理概念を論じる箇所から明らかにする。